

国際交流事後活動ニュース

MACRO COSM

◎特集 各地の交流活動紹介

●講演 国際交流の在り方について(猪口邦子教授)
(最終回)

マクロコズム '95.5



(財)青少年国際交流推進センター

vol. 4

～心かよいあう国際交流を～

今回は、各地で行われている国際交流事業を「ふれあい」「理解」「訪問・招へい」「文化」のジャンルに分類して紹介致します。



▲〈ブルネイへのホームステイ&スタディツアー〉
東南アジア青年の船同窓会による受け入れで行われたもの。副会長のジャイラニ氏宅にて同窓会メンバーと

「日本は、国際社会の中で多くを期待されている。」と言われる今日、国や地方公共団体のプログラムで国際交流事業を体験した私たちが成すべきことは何かを問いなおす時でもある。

国際交流には様々な場面があり、それぞれの必要性和大切さがある。しかし、最も大切なことは、真心と継続ではないだろうか。どんなに高邁な理論より自然にかけられた一言が、あるいは規模の

大きなイベントより小さくても回を重ねたプログラムが人の心を結びつけることがある。

日々慌ただしい日常生活を送る中でも、地域における国際交流の場面作りを心掛け、相互理解の大切さを忘れずに、仲間と協力して企画側として様々な工夫を凝らすことこそ、国際交流の楽しさと意義を知った私たちの役目ではないだろうか。

高知県青年国際交流機構▶

「海からみた高知 '94」

高知市～須崎市浦の内を県内の外国青年とともにヨット・クルーズ
参加者数 95 名（本文 P. 11）



～ふれあい～

在日外国青年と身近な場での交流を！



船と翼の会ふくしま

「国際交流いも煮会」

中国、台湾、マレーシア等の在県外国青年を招いて、東北ならではの「いも煮会」（本文 P. 12）

▲徳島県青年国際交流機構

「留学生とのもちつき大会」

日本の歳末を楽しんでもらおうと、中国からの徳島大学留学生ら 18 人を招いて会員と交流



～理解～

互いの主張を知り、違いや同じ部分を学ぶ場を作ろう。



◀山口県青年国際交流機構
「山口中国語弁論大会」
山口県国際交流協会設立5周年
を記念して開催
中国語で発表するアメリカの留
学生

青年海外派遣岩手県連▶

「ボイス・フォーラムいわて'94」
在県外国青年を招いての日本語弁論大会
歴史を重ねて12回目
「私から見た日本」という題で発表する
モンゴルのツェレンフー・プレヴドルジュさん

京都府青年国際交流機構（本文P.13）

「近畿ブロック海外派遣青年のつどい京都大会」国際協力について、講師を迎えて討議



地域の国際交流活動の推進を



日本青年国際交流機構
会長 大森 充

マクロコズムに事後活動が特集されるに当たりまして、日本青年国際交流機構会員及び国際交流の推進にご尽力されている皆様に、一言ご挨拶させていただきます。

私たちは、国の事業に参加した自覚と責任のもとに、地域の国際化の推進のために努力してまいりました。そして、その活動を充実するために、キーステーションの役割を果たす機能の必要性を痛感し、公益法人の設立を目指したわけですが、昨年4月の「財団法人青少年国際交流推進センター」の設立で夢が実現し、新たなスタートをきって1年を迎えました。財団の設立によって、都道府県事業参加者の皆さんとも連携が取りやすくなり、国の事業参加者である日本青年国際交流機構が持つ海外とのネットワークを活用してもらうこともできるようになり、そうした繋がりができつつあることは喜ばしいかぎりです。

今や日本は、国際社会の中で多くの役割を期待されるようになりましたが、私たち日本人がそれに対する十分な認識と必要な対応力を持っているかは、疑問の多いところではあります。私は、今の日本が育てるべきは、直接的に仕事として国際関係に就く人々ばかりでなく、日常生活のなかで日本人としての自覚を持ちながら、外国人とさりげなく接することができる感覚を持つ人々ではないかと考えます。

そのために、国や地方公共団体の事業によって素晴らしい体験をした私たちの一人一人が為すべきことは、まだ国際交流の素晴らしさを知らない人々に交流の機会を提供し、一人でも多くの人にボランティア活動の楽しさを知ってもらうことではないでしょうか。その意味では、改めて国際交流活動という旗振りをしなくてもよい程に多くの人々が活動するような時代を目指して、人の輪をひろげながら地域に根ざした継続的な国際交流活動の推進に頑張っていこうではありませんか。

主 な 内 容

国際交流の在り方について…………… 6～9 (猪口邦子氏の講演より 最終回)	アセアンとのトラベルネットワークの確立…………… 18 ホームステイ&スタディツアーの歴史
各地の交流活動紹介特集…………… 10～17	人物紹介コーナー…………… 19
「事業参加から広がった友情と活動」 高知県、福島県、京都府、滋賀県 大阪府、島根県、山口県	IYEO たより…………… 20

〈表紙の説明〉

インドネシア・14才の
Nyoman Putra D. さんの
「私の夢」
アジアのこども絵画展より
入賞作品

国際交流の在り方について(講演)



IV. 国際人としての条件

上智大学法学部教授
猪口 邦子

さて、ここで私は国際人とは何かということについて、一つの考え方を皆さんにぶつけてみたいと思います。

国際人というと、例えば英語は少しはできなければだめだろうとか、いろいろなことがあるかもしれませんが、私が考え詰めてたどり着いた一つの結論があります。国際人であるためには、難しい条件は何もなくて、ただ一つ重要なことがある。それは、男性であれば紳士でなければならない、女性であれば淑女でなければならない、ということだと思います。ここで、その国際人の条件、つまり、紳士、淑女の条件と同じなのですが、その条件を四つ挙げたいと思います。

① フェアーな精神

まず第一に、フェアな精神を持たなければだめだということですね。人はやはりフェアでなければ自分自身を守れない面があると思います。フェアでないで非常に卑屈な謝り方をしなければならない局面が出て来かねない。だからまず自分を守るという観点からも、フェアな態度で全ての人に接する、という基本的な姿勢が必要であると思います。もちろんフェアであるというこ

とは倫理的にも重要であるけれども、同時に自分を国際的な局面で守るためにもフェアでなければならないということだと思います。

② 優しさと勇気

二番目は、弱者に対する優しさということで、これは自分の言動としてしっかりと表現できなければだめだと思います。国際交流の先程あげた例でもお分かりになるように、人はいつ突然困って助けを求めるか分からない、だから自分が助けを提供できるときには、それをしっかりと言葉ないし行動で示せる勇気がなければだめだと思います。

日本では電車のなかで席を譲らなかつたりなど色々な問題があります。それを、日本人はちょっとシャイで気恥ずかしいからできないという人がいるんですが、しかし気恥ずかしいというときには、相手のつらい立場より、自分の気恥ずかしい気持ちの方を優先しているということですから、そんな小さな勇気も持ち合わせないということでは、もう国際交流も何もないと思いますね。ですから、優しい気持ちと、それを即時表現できる勇気というものを持たなければならないということだと思います。

③ 普遍的価値への認識

それから、三番目の国際人としての条件は、今の世界で普遍的に重要視されつつある価値、社会的価値に抵触しないということが重要だと思います。例えば、民主主義の原理であるとか、自由平等の権利であるとか、人権の理念であるとか、あるいは人種差別・女性差別撤廃の理念、これは社会正義といわれますが、そういう理念です。この理念はすべての社会で受け入れられているとは限りませんが、広く長い歴史の中で勝ち取られた価値なのです。

心の中で何を考えているかということについては、なかなかそこまで議論を及ぼすことはできないと思います。人はある意味で、皆偏見を持っているということから出発し、しかし、その偏見を出してはいけない、ということです。どういことがあっても、人種差別、女性差別あるいは民族差別的な表現をしてはいけないし、それから、民主主義とか平等の思想に反するような態度とか表現もいけない。そういうことに抵触しない、自分としての厳しさを持てるかどうか、ということだと思います。

④ 自己表現力

それから四番目、最後になりますが、口頭での自己表現力を高めるということです。まったく別の背景を持った人が出会ったとき、渡り合う方法というのは二つに一つだと思います。つまり武力で渡り合うか、言葉で渡り合うか。言葉で渡り合うことができる人というのは、より平和的な渡り合い方ができるという意味で、より高度な国際人

といえると思います。

口頭での自己表現力を高める。これは外国ではあまり問題ではないと思います。しかし、日本の教育課程の中では、自分で表現するよりも、しっかりと物事を覚えたり暗記したりということが中心になっています。ですから、日本の皆さんには、口頭でしっかりと表現することによって、言葉で分かり合える、論理性によって理解し合えるように努力することが必要ではないでしょうか。

国際人というときには、今申し上げたような条件を実現していないと、いかに専門的に優れていても、頭が良くても、共通の土台の中で戦っている、共通の世界に入っているという印象を与えることができないのではないかと思います。

ボックス・アメリカーナの時代

あと申し上げたいと思いますのは、最後に自分の専門の話に戻りますけれど、西側の諸国の間でも戦後しばらくは、アメリカが圧倒的に強く、秩序を世界に提供していました。これはボックス・アメリカーナの構造とも呼ばれます。そういう中で、日本は高度成長を遂げたし、経済国家としてかなり自立するにも至った。多くの国がボックス・アメリカーナの恩恵を受けてここまで来ていると思います。

ところが、アメリカがそのように一方的に世界の世話役を務めていると、どこかでアメリカが疲弊してくる局面があるわけです。レーガン時代には非常に強気であったアメリカも、今クリントンさんの時代になりますと、もう少し皆が積極的に

頑張ってくれなくては困る、皆の責任もあるんだという、色々な意味で負担を分担したり、共同で世界の問題に対処したり、というところにきています。アメリカだけが秩序を統括して、それで世界が面倒をみてもらってハッピーであった時代というのは、そこで終わっていくわけですね。

パックス・コンソルティスの時代

これからの時代はどういう時代になっていくかということを考えてとき、パックス・コンソルティスという言葉、最近学会ではよく使います。コンソルティスというのはラテン語から来る言葉で、グループとかコンソーシアムという言葉の元の言葉です。グループで国際社会の秩序を運営していくということです。どこか一国が世界の面倒をみるという時代ではなくて、グループで秩序を維持していく。例えば、G7体制、アジアのAPEC、ヨーロッパのCSC E、その他色々な地域で出てきています。国際政治も、共同で合議してコンセンサス・メイキングをしていくという運営の仕方に次第に移っていったというふうに言えると思います。

今後は、政府レベルでも、また、色々な市民ネットワークとか色々な団体のレベルでも、パックス・コンソルティスのような構造、共同で国際的に多国間に対応していくというやり方が活発になっていき、そのような仕事をこなせる人間が、かつてない程、必要になっているということだと思います。

その意味で国際交流というものが、何か政府

間外交の付け足しのような時代から、本質的に重要な時代になっていくだろう、そういう場面が非常にたくさん出てくるであろうと思います。

そういう中では、国際的な意思決定は非常に時間もかかるし、失敗も場合によっては多いかもしれない。また、利害調整も時間がかかるし、会議も非常に増える。無駄も多いかもしれない。

しかし、そういう中で、各国がお互いの問題を理解し合い、新しい問題について共通認識を築きやすくすることができるようになれば、究極の無駄である戦争とか紛争というものを阻むことができるようになるのではないかと思います。究極の無駄は戦争ですので、それを阻むために国際的な交流がいかにか重複してあっても、たくさんの労力と費用をかけて行われても、それは多分、国際社会にとって、無駄ではないんだらうと思います。

産業化と戦争の20世紀

最後に、私達は今20世紀の終わりにいますが、20世紀というのはどういう時代だったか、ということを考えてときに、色々な人が色々なことを言っています。例えば、レーニンは20世紀は戦争と革命の世紀と言いましたが、20世紀を私なりに考えてみたときに、それは、産業化と戦争の世紀だった、という気がします。産業化といえば、かつてない大量生産、大量消費の産業社会を作りました。戦争についてみますと、20世紀ほどたくさんの人が戦争をした時代というのはなかった。人類史の中で20世紀ほどたくさんの戦死がでた時代はないんです。有史以来19世紀の末までの

戦死の規模を算出します。そして、20世紀の戦死の規模を算出してみます。そうすると、20世紀における戦死の規模は、すでに有史以来19世紀末までの戦死の規模を越えている。つまり、その総和を越えている。ですから20世紀ほどたくさんの方が戦争の犠牲になって、またそれを嘆く人が多かった時代というのではない。

これは人類史の中でも稀な世紀であったといえると思います。20世紀とは戦争の世紀、戦死の世紀でもあって、そういう意味ではまことに不幸な世紀であったと言えます。

戦争を防ぐために

ですから、私達の課題というのは、どうやって戦争を防ぐことができるか、戦争を克服することができるか、ということではないでしょうか。国際交流の原点、出発点というのはそのようなところがポイントであると思います。自分たちの生きた20世紀のこの世紀末という時代、これはまさに戦死の世紀の終わりにしなければならないだろうと思います。

どうやって諸国間の最悪の不幸である戦争を防ぐことができるのか。そして、そのために、お互いに文化を理解し、交流し合い、重層的に国際的なネットワークを作っていくことによって、万が一国家が暴走しそうになったとしても、市民がそれを阻む、あるいは経済界がそれに待ったをかけることができるかどうか。

その昔、政府間だけの外交の時代には、政府間だけで戦争の決定がなされたわけですが、この時

代になれば、相互依存が深まって経済社会的な交流も深まるし、市民とかNGOとか学生とか研究者とか、色々な独立したネットワークを国際的に張りめぐらせて、国家が一枚岩的に戦争に暴走することなど考えられない、というふうになっていくべきではないだろうか。そこまで国際交流のネットワークが強いものに発展したときに、私たちは本当に20世紀を去ることができるのかなというふうに思います。

少なくともこれからの21世紀が、20世紀のような不幸を繰り返すことは絶対に許されないだろうと思います。国際交流の出発点は、やはりその思いではないかというふうに思います。

平和の大きなともしびを

私達はいま平和な日本にいます。多くの国が実際非常に平和になっている。冷戦も終わって平和になっている。しかし、この平和というのは人類史のなかでも未曾有の悲劇を経験した20世紀の果てにおいて、ようやく見えてきた一つの明かり、光であって、それを当然のことと思うべきではないし、それを大きなともしびにしていくのは、自分たちの責任である、というふうに考えたいと思います。

そういう役割において、全ての方が主人公であり、特に若い人たちの責任が大きいと思います。これからの国際交流についても、ご一緒に、それぞれの持ち場で頑張っていきましょう。

(おわり)

各地の交流活動紹介特集

～事業参加から広がった友情と活動～

渡 部 和 恵

〔1983年第10回東南アジア 青年の船参加青年〕
〔1994年第21回東南アジア 青年の船ナショナルリーダー〕



東南アジア青年の船に参加したのが12年前、その後いろいろな活動を通じて、私の人間関係や視野は大きく広がっていった。私にとっては、船に乗っていたときと同じくらい、船を降りてからの活動が楽しく、実り多い。

私が今まで続けてきたのは、東南アジア青年の船の受入れ委員会のお手伝いや83年にプログラムで知り合った友人との手紙のやりとり、ホームステイの受け入れ（ただ家に呼んで騒ぐだけだけど）、ニュースレターの発行。

その後ひょんなことからIYEO本部の活動に関わるようになったのが3年前のことだ。なんとなく企画部の一員となり、東南アジア青年の船の同窓会活動などを中心に関わってきた。参加年度や年齢、職業、また参加事業の違う人とも一緒に会合を開き、話し合い、作業をしていくのは、楽しく、またいろいろなことを学ぶことが出来た。

今までで一番印象に残っているのは、1994年のゴールデンウィークに企画したSSEAYPインターナショナル第7回総会だ。東南アジア青年の船同窓会組織が1年に1回各国持ち回りで開催する総会で、7回目が日本で開催されたのである。

私は「アジアのこども絵画展」等を担当したが、

限られた予算と人手不足（全員がほかに仕事や学業のあるボランティアだった）に苦労した。今かえりみると、ああすれば良かったということばかりが思い浮かぶけれど、海外からも130人以上の参加者があり、何とか終了した。この総会運営を通じて実感したのは、同窓会組織を通しての人のつながりやネットワークの素晴らしさである。いろいろな分野で活躍する人がいるし、よい仲間との出会いが何よりの財産となった。

昨年の秋には、東南アジア青年の船にナショナルリーダーとして参加し、また素晴らしい人達との出会いに恵まれた。合計300人近い友人や知人と船の寄港地で再会し、新しい人とも知り合えた。

総務庁の事業に参加した人は、不思議と皆熱いところと希望にあふれている。昨年の船の参加青年も、やる気と元気いっぱい、行動力のある素晴らしい人達だった。

これからまた、どんな人と知り合い、どんなことを話し、どんなことをやっていくことになるのか楽しみだ。

事後活動は、あまり無理せず、自然体で、プログラムに参加したときの熱い想いを思い出して、仲間と一緒に楽しんでやるのがいいと思っている。

海から見る高知 '94

(ヨットに乗って国際交流してみませんか)

“ふるさと高知は雄大な太平洋に面し、私たちはことあるごとに海を眺めて暮らしている。では、海から見る高知はどんな姿を見せてくれるのだろうか……。”

そんな素朴な思いから始まったこの企画も昨年までで2度開催することができ、年内の一大イベントとして定着した感がある。

私たちの組織は自主財源も少なく、年間の限られた予算でなんとかやりくりしている中で、通常では考えられなかったこの企画も、メンバーの一人が個人的に趣味としていたのがヨットということで、話は一気に実現へと向かうことができた。

この企画は私たち高知ヨットクラブのメンバーが中心となり、県内在住の外国人及び希望者を募集して、約100名でヨットクルーズを中心に、寄港地でのバーベキューパーティや県内の外国人との親睦及び意見交換、ヨットの操舵体験などを行っている。

港を朝出発し、車で1時間くらいの場所へ2、3時間かけてゆっくりとクルージングをしながら、ヨットという限られたスペースの中で過ごす。乗船者については、できるだけ初対面の人と外国人とをうまく振り分けることによって、親睦の輪を広げるように工夫している。船での共同生活を体験した人なら理解できると思うが、限られたスペースの中にいると何か不思議な連帯感のようなものが生まれてくるもので(私の個人的な考えかもし

れないが)、このヨットという乗り物自体が親睦のためのひとつの手助けにもなっていると思う。

最近は飛行機に乗ることは珍しくなくなってきたが、ヨットを体験できる機会は少なく、また海から高知を見ることもめったに味わうことができないとあって、参加者からも毎回好評を得ている。

今後については参加者の意見を聞きながら、息の長い事業とするために、実施内容についての見直しを考えているところで、事業に対する予算確保や実施規模の拡大などを柱に、本年度の企画を検討している。

私たちの組織では、身近にあるものや自分たちが持っているものを生かして、何らかの形で国際交流ができればと思っている。以前とは違って、外国人に対しては“お客さま”という認識からは脱却して、私たちと何ら変わることはない関係を他の人たちに理解してもらうために、微力ながら活動していきたい。

会長 川田 宗範



国際交流いも煮会

昨年10月16日(日)に「平成6年度国際交流いも煮会」(第2回)を実施しました。

この事業は、福島県が行っている「ふくしま国際交流月間」への参加事業として、毎年、県内各地域もちまわりで行っているものです。福島県は県土が広いので、会員の中には、県内でありながらも他地域の会合にはなかなか出席できないという人も多くいます。そのような会員に、少しでも多く会の行事や運営に参加してもらえよう、事業の開催地を県内各地に設定しています。

今回は、福島県の南東に位置し、海に面したいわき市の新舞子浜を会場にしました。会場の決定、当日の案内板等、会場のセッティング、材料の買い出し、買い足しと、すべて地元のいわき市の会員の皆さんに活躍していただきました。

この行事は2回目ですが、今回は30名の参加者を見込んで計画をたてました。ところが、県や郡山市の国際交流のパンフレットに載せていただいたことにより、反響が大きく、「問い合わせの電話なんてたぶんいかないから。」と昼間連絡がとりやすい、会員の平子絹江さん(第12回青年の船)に連絡先として気軽にお問い合わせしたら、外国人からの怪しげな日本語での問い合わせや、ラジオの出演依頼やら、仕事にならないほど電話がかかってきてしまいました。さらに、いわき短大の職員や留学生の皆さんのご協力を得て、総勢52名のいも煮会を行うことができました。

中華民国8名、中華人民共和国2人、インドネ

シア1人、タイ1人、ミャンマー1人、マレーシア1人、ブラジル1人と、外国出身の方には15名も参加していただきました。

料理は、いも煮の他に、餃子、台湾の焼ビーフン、インドのナンとカレー、バーベキューと、バラエティーに富み、それぞれの国の作り方を教えたり、教わったりしました。特に餃子は、中国系の人々を中心にアジア各地で一般的な家庭料理であるらしく、地方地方で作り方に差があり、興味深いものがありました。

食後は、バレーボールや輪投げに、大人も子供も興じました。輪投げの景品の中に、デフォルメされたかわいらしいウルトラマンの人形があり、それをやっとのことで獲得した台湾出身の葉さんが、「私、子供のころテレビでウルトラマンが大好きでした。」と話してくれたとき、アジアの国々って、たくさんの文化を共有している隣人同志なのだ改めて実感しました。

私たちの会は、外国人をお客様として特別扱いはしません。ただ、福島という地に一緒に暮らす隣人として、そして友人として、彼らと接していきたいと考えています。

一緒に料理を作り、秋の一日を青空の下で無邪気に過ごせた今回のイベントは、楽しく皆さんの思い出に残ることと思います。

「船と翼の会ふくしま」は、今年度も山登りをはじめ、楽しいイベントを企画しています。県外の皆さんも機会がありましたら、おいでになりませんか。お待ちしております。

会長 新井喜美子

自分たちの大会とするために

平成6年度近畿ブロック海外派遣青年のつどいが2月11日(祝)、12日(日)に京都で行われた。今大会を企画するにあたり実行委員会では、①参加者をできる限り多くする、②手作りという京都らしさを出すということを目指して、全員一丸となって取り組んだ。

* 参加費をできる限り安くする——最近のブロック大会では、参加費が1万5千円前後となっており、どうしても若年層の参加が芳しくないように思えたので、今大会では参加費をできる限り低く抑え(1万円)、幅広い層から多数の方に参加していただくよう考慮した。

* 講演を事業参加者OBに依頼する——私たち海外派遣事業参加者の中には、帰国後も積極的に国際交流に携わっておられる方が多数居られる。今大会では、講演を外部の方に依頼するのではなく、京都府のOBの中から現在も国際交流に深く関わっておられる齊藤文彦、坂尻仁彦両氏に講演及びパネルディスカッションをお願いし、参加者が聞いて楽しみ、堅苦しくない講演を試みました。

* 今年度派遣事業参加者による帰国報告会を行う——事業参加者による帰国報告会は各府県ごとでは行われているが、近畿ブロック全体としては行わなかった。今大会では、近畿ブロックのより一層の結束を図るため、近畿圏で平成6年度に海外派遣事業に参加した人が、合同でそれぞれの報告をしてもらうことにした。(これは近畿ブロック会議で検討された事柄)

* オリジナル観光マップの作成——今大会は連休中に行われるものであり、また京都という土地柄から観光を兼ねて参加される方もおられるかと考え、主要駅の時刻表、バスターミナル案内、観光名所等を記載したオリジナルの観光マップを作成し、他府県からの参加者に配付した。

以上、今大会で工夫したものを挙げてみた。残念ながら、参加人数は阪神大震災の影響もあって、当初予定の人数には至らなかったが、もう一つの主題であった手作り、オリジナリティーといった点では、満足のいく結果であったと思う。

また、大会初日に講演会を、2日目に帰国報告会を行うことにより、最後までだれることのない充実した大会とすることができた。加えて今大会は、阪神大震災後初めてのブロック大会ともなった。懇親会で義援金を募集したり、大会にかけて下さった京都府OBの被災者の方から生の声を聞くなど、改めて被災者の方々のために我々が何ができるのかということを考える場とすることもでき、そちらの面からも有意義な大会であったと思う。

近畿ブロック京都大会実行委員会
事務局長 荒田 圭久



「滋賀県若人の翼」事業

本事業は「滋賀県青年の船第10回記念事業」で我々IYEOの先輩たちが大いに活躍して素晴らしい成果を上げたのを契機に、1979年に第1回目が始まった。以来東南アジアの青年たちとの交流を続け、1987年からは県の補助金も得られ、本年は第10回目を迎えることができた。この若人の翼事業は、本当に手作りのもので、過去に参加された団員にも実行委員に加わっていただき、実行委員会の手で全て企画してる。

今回は、11月1日から6日まで、タイ国での研修とし、10回記念の「1994年滋賀県若人の翼」に参加する青年には、1994年にオープンした関西新空港から飛び立つのが一番相応しいのではと考へての設定した。しかし、フライト時間に変更があったり、名神高速道路の夜間工事で帰りの予定が変更になったりというハプニングもあり、また現地では、日本大使館への公式訪問が、皇太子ご夫妻のバンコクご訪問の影響で、全員訪問の予定が団長・副団長のみの表敬訪問となったりで、団員の方々には迷惑をかけた部分もあったが、総勢32名のタイ国での研修は、交通渋滞を除いては、基本的に全日程の研修を運ぶことができた。

水の都バンコクの風景や仏教を重んじるタイ国の風習、古い歴史の町スコタイやアユタヤの見学等を通じて、タイ国のお国柄をこの目で確認することができた。また、スコタイに行く列車の車窓からは、米どころタイ国を実感させられた。

団員の一番の楽しみであるホームステイは、2



～6名のグループに分かれて行われ、タイの人々の生活の一部をかい間見ることもできた。

帰国前夜のさよならパーティには、タイ滞在中お世話になった方々をお招きし、予想以上の盛り上がりで、ゲーム・歌・踊り等に、タイ・日青年一同が一つとなり交流することができた。これは、「1994年滋賀県若人の翼」事業の成果であり、団員各位の本事業に対する意気込みを大いに感じることができた。

今回も前回に引き続きIYEO本部事務局の幹旋により、東南アジア青年の船タイ同窓会にタイ現地での行程を全て企画していただき、終始お世話になり、手厚いもてなしを受けた。

タイ国総理府青少年局を公式訪問し、事務局長とも面会できた。時間の関係等で十分なお話が出来なかったのは残念であったが、タイの公的機関の訪問は、一般の旅行では体験できないもので大変有意義なものであった。

「滋賀県若人の翼」事業に参加した湖国（滋賀県）の多くの個性ある青年たち（これまでの総参加者約250名）が翼での体験を通じて、それぞれの地域社会の発展のために活躍され、より大きくはばたかれることを、心より期待している今日この頃である。

会長 雨宮美津子

SSEAYP 代表団受入れを終えて

近畿府県青年国際交流機構は2月26日から28日の3日間、大阪を中心とした東南アジア青年の船同窓会代表団8名の受入れを行いました。

代表団は、80年代に東ア船に参加された各国の役員で構成されていて、総務庁の招へいによる東京での公式会議を終えて近畿を訪れたものです。

滞在中は、出来るだけ堅苦しくなく、また、近畿のメンバーが参加しやすいプログラムになるように配慮しました。

行動の記録から3日間を振り返ってみますと…

26日の昼過ぎ、大阪の役員・東アのOB・OGらの出迎えを受け東京から新幹線に到着。代表団のたつての希望もあり、一路、兵庫県西宮の阪神大震災被災地へ。ここでは、被災現場の視察をした後、IYEOと連携を取りながら活動している朝日新聞大阪厚生文化事業団ボランティア基地で被災状況の説明を受け、熱心な質問が出されるなど関心の高さが伺われました。夜は、総勢30名になった近畿のメンバーとの交流会で、各国の歌・カラオケ・踊り等楽しい一時を過ごしました。その後、折しも雛祭り前だったので、プログラムに入っていなかったホームビジットを実施、酒井副会長宅にて雛飾りを見せていただきました。

27日は、早朝より大阪城を見学の後、(財)大阪府青少年活動財団を表敬訪問し、大阪における青少年の国際交流活動への取組や青少年健全育成事業の現状など活動の様子を学習する機会を持ちました。その後バスに乗り、奈良県のメンバーが

待ち受ける古都・奈良へ。昔ながらの茅葺き屋根の茶店で昼食。この時間モスリムの団員はラマダン期間中のため食事が取れず、「鹿せんべい」を求め、鹿とたわむれるなどして時間調整。ここでは、学生ボランティアガイド2人も加わり、春日大社、若草山、お水取りの準備が進む二月堂大仏殿と市内の観光名所を見学、拝観。大阪に戻って、大規模スーパーでの買い物タイム。夕食は、大阪名物「お好み焼き」で、慣れない手つきで焼くお好み焼きはおつまものでもあり、忘れがたい一時となったことでしょう。翌28日は、開港したばかりの関西国際空港から帰国されました。

2泊3日と大変短い期間でしたが、私はこの受入れを通じて、東南アジア青年の船各国既参加青年組織が活動的で強固なこと、各国間のネットワーク化がうまく図られていることを強く感じました。このつながりを活用し、各県IYEOが独自派遣を生み出したり、多様なスタディツアーが組むことが可能になると思います。

来阪された皆さんとまたいつの日にか大阪で、いやそれぞれの国でお目にかかれるのを楽しみにして活動に頑張っていきたいと思います。

大阪 IYEO 副会長 松本 仁孝



留学生支援バンク

以前、青友会事業で市民の皆さんへ働きかけて、家に眠っている使える不用家庭用品を集め、留学生に渡したことがあった。冷蔵庫、洗濯機、テレビから食器、衣類にいたるまで、多くの物品が集まり、受け取った留学生にも喜ばれたが、問題点もあった。それは回収した物品の保管場所や、残った物の返還の手間、それに限られた日時。

そこで、何かよい方法がないかと知恵を絞ったのが、この「留学生支援バンク」。これは提供者に物品を登録してもらい、留学生がリストを見て希望物品を引き取りにいくシステム。

このメリットは、保管場所がそれぞれの家庭であり、記載された保管期間内（提供者が指定）であれば、留学生は提供者とコンタクトをとることでいつでも物品を手に入れることができることである。当初はパソコン通信の特設ボードで行うことも考えたが、まだまだ一般的でなく、この場合、原始的な登録カードの方がより有効であろうということで、このシステムでスタートした。

「留学生支援バンク」の呼びかけパンフと登録カードは、市内全公民館と小学校3校に配付。集まってきた提供者の物品リストは、(株)島根県国際交流センターでいつでも留学生が閲覧できるようになっており、同センターの職員（中国語・韓国語・英語・出雲弁？スタッフ）にも協力していただいている。引っ越しや新入留学生の移動の多い3・4月には、毎週火・金曜日の夕方6時から青友会会員が待機し、同センターで提供者と留学生

の橋渡しをしている。

このシステムの狙いは、家で眠っている不用品を、経済的に苦しい留学生に使ってもらうことはもちろんのこと、提供者と留学生がこれを通じて知り合い、身近な国際交流が始まればと考えた。

昨年の12月にスタートして予想を上まわる件数が成立し、留学生のお礼状も大きな潤滑油となって、身近な国際交流の芽生えが出てきている。

松江市のAさんは、ストーブ・電気毛布を提供することで中国の留学生と親しくなった。Aさんは一人暮らしのおばあさんで、彼の訪問をととても喜び、それをきっかけに交流が始まっている。留学生にとっても、市民との交流のチャンスを得たことは、良き理解者を増やすことでもあり、島根での生活の幅を更に広げることができる。

これからは、この事業そのものに留学生もボランティアとして参加してもらい、青友会と留学生がうまく役割分担して、一緒に育ててゆこうと声をかけ始めている。すでに、この事業を活用している中国人留学生のシーさんはやりたいと言ってくれている。

あとは、地道に続けられるよう、皆で工夫をしていくことが課題だ。

事務局長 青戸 裕司

※先日NHKがこれを取り上げ、4月1日5分間の番組としてローカル放送された。

映画でアジアを紹介しよう！

我が県には、自分の得意分野を発揮して色々と活動しているメンバーが数多くいますが、今回は「アジア映画上映会」を通じて、地域の国際理解と交流の裾野を拡大している点を紹介します。

〔歴史〕

12年前より開催されていた中国映画の上映会での反響がきっかけとなり、下関市内で、その年のアジアでの話題作をとりあげた「下関アジア映画祭」が実施されています。

山口市内でも、中国人留学生の増加と共に、市民の中国語学習熱が上がり、映画上映の実施について熱心な声が聞かれるようになり、昨年2月から山口県青年国際交流機構会員の児玉頼幸さんが「山口映画友の会」を設立し活動を展開しています。

資金の援助と今後の活動

（助）山口県国際交流協会や、山口メセナ倶楽部及び山口県・山口市両教育委員会より助成対象事業に選定いただき、活用しています。

何よりのアジア紹介活動ということで、山口メセナ倶楽部からは、破格の助成をいただいています。また、映画を通じての語学弁論大会や料理教室、そして海外旅行の企画など、その領域はどんどん広がっており、関係する人脈の太さと会員の活動展開に今後の期待がかかってくるところです。

今後の予定

- 5/27 中国名作シリーズ3弾「芙蓉鎮」
- 6/3 日本「全身小説家」キネマ旬報'94
- 7/29 中国「息子の告発」中国映画祭94
- 9/2 中国「哀戀花火」山口アジア映画祭
会場：山口県教育会館

「山口映画友の会」

目的：映画というメディアを通して、外国の生活に触れ、その国の文化や歴史、風俗に対する理解を深めるために、2カ月に1回程度中国映画を中心に上映会を開催する。

組織：代表 児島頼幸（山口県国際交流室勤務）
幹事 張蒙春（山口県国際交流員）

〔連絡先〕 山口市吉敷2602-1 公舎B105
TEL 0839-32-4151

登録会員：上映会のお知らせを欲しい方は、登録できます。現在220名余り。

会長 中野 智昭



ホームステイ&スタディツアーの歴史



東南アジア青年の船のアセアン各国同窓会組織との間で、相互理解の促進を目指して、ホームステイを基本とした相互交流を行うためのトラベルネットワークのプロジェクトが提唱されてから早6年が経過した。

日本青年国際交流機構本部が、シンガポールへのホームステイ&スタディツアーを行ったのは1991年10月であり、以来タイ、マレーシア、フィリピン、ブルネイと続いている。

各県レベルでのトラベルネットワークの利用第1号は福井県で、県の翼事業でマレーシアを訪問した際に地元青年との交流会をセットしたものである。その後、沖縄県 IYEO が翼事業でインドネシアへ2回、そしてタイへの訪問。滋賀県 IYEO はタイへ続けて行っており、愛媛県 IYEO が主催したブルネイへの環境をテーマにしたツアーも大変好評だった。

いずれも、各国同窓会組織のコーディネートにより、ホームステイ、公式訪問、地元青年との交流及び文化交流のプログラムが組み立てられ、続

けて計4回参加しているメンバーもいるほど好評である。

その秘密は、受入れをしてくれているアセアンメンバーのホスピタリティである。「東南アジア青年の船」は、アセアンの青年に国際交流の素晴らしさを伝え、ホスピタリティあふれる青年を育てることができたのであると言っても過言ではあるまい。21回継続した「東南アジア青年の船事業」が、こうした形でも素晴らしい花を咲かせつつあることを皆さんにお伝えするとともに、一人でも多くの方にアセアンの人々との交流の素晴らしさを体験して欲しいと思う。

日本青年国際交流機構副会長 早川理恵子

今年度のスタディツアーへのお誘い

- I. アセアン6か国に、4泊5日又は5泊6日のツアーを行う。
- II. ホームステイは2泊以上とする。
- III. 表敬訪問及び公式施設への訪問を含む。
- IV. 時期は、8月初旬、11月下旬、来年2月の頃を基本として各国と調整する。
- V. 参加資格 高校生以上（但し、保護者がついていく場合は小学生、中学生も可。）

以上の方針で計画し、順次お知らせしてまいりますので、ぜひご家族、友人知人をお誘いあわせのうえ参加してみませんか。

人物紹介コーナー

このコーナーでは、国際交流の振興に携わる人々を、様々な分野から紹介していきます。
まずは、国の立場から。総務庁青少年対策本部に、こんな係があることを知っていますか？

国際交流振興係

総務庁の青少年国際交流事業に参加した方は、それぞれお世話になった担当係を覚えていると思います。しかし、事業参加後もお世話になっている部署が「国際交流振興係」です。「事業参加は単なる入口。そこで得た人と感動を継続させて、新たなものを産みだしてこそ価値がある」との理念のもと、青少年対策本部の国際交流事業全般の取りまとめを行うとともに、地域の国際交流の振興のために事後活動の推進に努めるのが、この係の仕事です。しかし、その苦労は大変なもの。まさに裏方です。

今回は、私たちの事後活動に対して大きな力となってくれている担当スタッフを紹介します。

松田国際交流担当参事官： 国際交流班の責任者。第7回世界青年の船管理官として「にっぽん丸」での2ヵ月を体験し、この3月に下船したばかりの熱血漢。船上での呼び名が「親分」。今日も、オフィスに元気な松田節が響き渡っています。

林国際交流担当調査官： 第21回東南アジア青年の船管理官として昨秋乗船。OECD代表部勤務で鍛えられた英語力は相当なもの。ソフトな人柄だが、仕事には厳しい。

原国際交流振興担当補佐： 淡々としたニヒルな振舞いと口の悪さに驚く人は多いが、仕事をさせ

たら天下一品。付き合いが長くなるほど良さがわかってくる人。

佐藤国際交流振興担当係長： 昨秋の国際育成交流事業のジョルダン派遣団に副団長として参加。自他ともに認める口の悪さは振興係長の伝統か。でも、いつも最後まで面倒を見てくれます。昨年暮れに男子誕生で、お父さん1年生。

郡山国際交流振興担当係員： 昨年度第7回世界船管理部員として乗船。忙しい振興係での勤務は大変でしょうが、宜しく！ 私たちが、細かいことで最もお世話になる女性。

角井（つのい）さん： 第5回世界船参加青年で第7回サブナショナル・リーダー。なぜか、振興係に勤務中。

（次回は、青少年対策本部の各事業担当スタッフを紹介します。）



IYEO たより

阪神大震災救援ボランティア活動報告

前回の Bulletin Board で救援ボランティアを呼びかけましたが、全国より様々な方の応募があり、ご応募くださった皆様には神戸市灘区にある避難所の一つ「青陽東養護学校」で活動をしていただきました。ここは、収容人員 500 名の大所帯で、被災者による共同生活自治委員会がしっかり組織されており、救援活動ボランティアが始めての人でも委員会スタッフとともに活動が可能になっています。参加したメンバー共通の言葉は「短期間なのでたいしたことはできないが、共に過ごすことで多くのことを考えることができた」というこ

とでした。

新たな動きとして、神戸市立港島小学校に、シンガポールの東南アジア青年の船同窓会組織を通じてシンガポールの子供達から励ましの絵を贈る計画が進んでいます。集まった義援金はこうしたプログラムの資金にも活用されます。

「中部ブロック大会」のお知らせ

平成 7 年度の中部ブロック大会は、三重県で開催されます。三重県では、フレッシュな新役員が大会開催に向けてはりきっています。

日 程：9 月 9 日(土)～10 日(日)

開 催 地：神都「伊勢」

実行委員長 石川 謙二（第 18 回東ア参加）

編集後記

やっと完成！掲載したい記事はたくさんあるけれど、スペースは限られているので編集に四苦八苦。今回は各地の活動紹介に徹して構成してみました。いかがでしたか。各地でみんな頑張っ

ている様子が伝わってきてスタッフ一同励まされました。

今回は、第 7 回世界青年の船と国際協力活動を中心にお届けする予定。（Y, M, R, O, K）

* 本誌の年間講読をご希望の方は、(財)青少年国際交流推進センターまで葉書又は FAX にてお申込み下さい。年間講読料は 1,500 円です。

MACROCOSM (マクロコズム) 5月号 Vol.4 1995年5月1日発行(隔月発行)

編 集：マクロコズム編集委員会

発 行：財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103 東京都中央区日本橋人形町 2-35-14

TEL 03-3249-0767

FAX 03-3639-2436

編集協力：総務庁青少年対策本部

日本青年国際交流機構

定 価：195 円(本体 189 円)

印刷所：絢文社

TEL 03-3959-3960

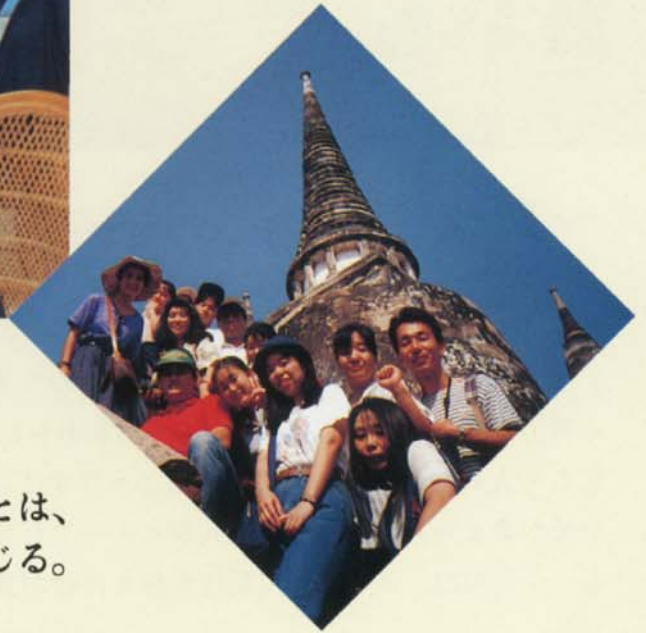
島根県国際交流青友会

▼「インターしまね友好の翼」でフィリピン派遣。セブ市長への表敬訪問



滋賀県青年国際交流機構

▼「滋賀県若人の翼'94」でタイ派遣
(本文 P. 14)



～訪問・招へい～

互いの国を訪問しあい文化・生活を知ることが、
理屈を越えた親近感がわき、互いを近く感じる。

〈総務庁青少年対策本部招へいのアセアン各国代表者の受け入れ〉(本文 P. 15)

大阪府青年国際交流機構

財)大阪府青少年活動財団にて代表あいさつを
▼するフィリピン同窓会会長



IYEO 酒井副会長宅へホーム・ビジット
▼「雑祭り」を体験して大感激





◀ 最優秀賞受賞を喜ぶタイ同窓会の代表者

この絵画展は、SSEAYP インターナショナル第7回総会の日本開催に際して国際家族年を記念し、昨年4月27日から5月1日の期間「夢」と「家族」をテーマとして、「新宿文化センター」で行われた。ともすれば海外援助や経済面からのみ捉えられがちなアセアン各国を、子供たちの絵を通して、教育・文化の観点から身近なものとして紹介し理解を深めることを目的としたものである。

～文化～ 「アジアのこども絵画展」

文化交換のルートを自分達で築いていこう。

アセアン各国との連携強化に注いできたこれまでの努力が報われ、各国の見事な協力体制のもとに、私たち大人に元気を与えてくれるようなすばらしい絵が集まった。しかも、大人がイメージしている「子供の絵」より遙かに期待を越えた絵が集ま

り、IYEO 各県の努力により、中央会場ばかりでなく16都府県でも「アジアのこども絵画展」を開催することができ、好評を得た。(青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島、栃木、東京、福井、大阪、広島、山口、徳島、愛媛、宮崎、沖縄)

宮崎県青年国際交流機構
昨年6月宮交シティ・アポロの和泉と江南小学
▼ 校の2か所で開催。絵に見入る生徒と先生



▲ 大阪で開催された際の展示会場の様子
近畿ブロックとして共同開催